

“プロの技” との最高の出会いを！

「ものづくりふれあいフェア 2018」

7月21日（土）・22日（日）の両日、ビッグパレットふくしま（多目的展示ホールB、C・屋外展示場）で「ものづくりふれあいフェア 2018」が開催された。このイベントは厚生労働省委託事業「平成30年度若年技能者人材育成支援等事業」の地域における技能振興の一環。次代を担う児童らに、技能士が持つ技の素晴らしさを紹介し、技能継承の重要性について考えてもらうことを目的としている。郡山市内はもとより、県内各地から会場を訪れた大勢の小・中学生たちは、経験豊富な技能士などの丁寧な指導のもと、多彩なものづくりの魅力を満喫した。



待望の「夏休み初日」に開幕！

ものづくり体験は今年も大盛況



今年で6回目を迎えたこのフェアには“リピーター”も多く、会場の入り口には開場前からたくさん親子連れの姿が見られた。午前10時から行われたオープニングセレモニーには畠利行副知事をはじめとする関係者が出席。主催者である福島県職業能力開発協会の福井邦顕会長は「今年もぜひ多くの子どもたちにもものづくりの魅力と楽しさを体感していただきたい」と挨拶を行った。

例年、県内の職能団体や技能士団体、学校などによる「作品の展示」や「ものづくりの実演」が行われているが、中でもメインとなるのは小・中学生を対象とした「ものづくり体験」だ。24団体が提供する計43種類のものづくり体験はいずれも無料で、開場と同時に参加申し込みの行列ができるブースも少なくない。

福島県職業能力開発協会の安司敏憲専務理事は「来場者数は年々増加の一途。去年が

9,866名でしたので、今年は1万名の大台に乗るものと期待しています。これは過去の参加者が満足して口コミを広げてくれた結果であり、技能士団体や職業訓練校などの皆さまによる全面的な協力のおかげです」と関係者への感謝を口にする。「東日本大震災の発生以後は人口の県外流出が進みましたが、このイベントを機に、子どもたちが地域で職を得て生きていくことの魅力に気付いてくれれば幸いです」。



伝統産業から最新のIT技術まで 1日では回りきれない体験コーナー



周囲に美味しそうな香りを漂わせていたのは「卵焼き体験」(福島県日本調理技能士会)だ。参加者は出汁を入れてかき混ぜた卵を、よく熱されたフライパンに流し込んでいく。火傷をすることがないようにプロの技能士らがサポートしてくれてはいるものの、子どもたちの顔は真剣そのもの。

出来上がった卵焼きを頬張った瞬間、表情が一気に緩んでいくのが印象的だ。「卵焼きには、ちゃんとした昆布出汁やカツオ出汁を使っています。和食の魅力を知ってもらうには、まず本物の味を知ってもらうことが大切ですからね。指導している技能士たちは日頃、飲食店や旅館、ホテルなどで働いていますから、実は今日(土曜日)は忙しいですよ(笑)。でも『子どもたちが喜んでくれるなら』とみんなで協力して運営しているわけです。我々としても、こういう場所で自分たちの技量を見てもらえることは嬉しいですね」(同技能士会 齋藤清男会長)。



「紙工作」(福島県紙器ダンボール箱工業組合)のブースでは、厚紙で将棋盤と駒、昆虫の形をしたヤジロベエ、一輪挿しなどをつくることができる。一輪挿しにはペットボトルを挿入することで、実際に花を飾ることができるという。完成したものはどれも持ち帰れるとあって、児童らは一生懸命に工作に取り組んでいた。「よく『日本のものづくりは優れている』といわれますが、技能五輪の国際大会などを見てみると、ヨーロッパをはじめとする海外の国々にも優れた技能士が大勢いるんです。

見ていると、ヨーロッパをはじめとする海外の国々にも優れた技能士が大勢いるんです。

日本は資源に乏しい国ですから、このフェアのような催しをきっかけに、技能士を目指す子どもたちが増えるといいなあと思いますね。近年はインターネット通販で使われるダンボールの需要が増加し続けていますし、豪雨によって被災した地域ではダンボール製の簡易ベッドなども使われています。紙工作を体験してくれた子どもたちが、いつか業界に入ってきてくれると嬉しいです」(同組合 橋本邦俊理事長)。



女子児童らから圧倒的な人気を集めていたのは「チュールロゼットづくり」(学校法人今泉学園 今泉女子専門学校)だ。ロゼットとはリボンや布などで作る花形の飾りで、記章や胸飾りなどに用いられる。近年は空前の手芸ブームということもあり、申し込みを訪れる参加者が途切れず、なかなか取材できないほどの盛況ぶりだった。「指導にあたっているのは現役の学生たちです。手

芸や洋裁の技術は様々な業界で求められているので、私たちの教え子は地域の縫製工場からNHKの大河ドラマの衣装作りまで、幅広い職場で活躍しています。今日ものづくり体験を楽しんでくれたお子さんたちの中から技能士が出てきてくれるといいですね」(同専門学校教員 渡辺仁子さん)。



「A I (人工知能) プログラミングアプリ」(福島県情報産業協会)のブースでは、参加者たちが紙にアニメの人気キャラクターの絵を描き、それにスマホをかざす姿が見られた。一体何をしているのかと尋ねると「子どもたちはいまA Iを育てているんです」(株式会社福島情報処理センター 経営企画部 FF プロジェクトリーダー大久保仁さん)とのこと。スマホに

インストールしたプログラミング学習アプリ「Hello Think!」に自分が描いた絵を見せて、例えば「バイキンマン」と回答が提示されたとする。もし描いたのがアンパンマンであれば、そのことをアプリに教え、その絵を「(バイキンマンではなく) アンパンマン」と認識するようにアプリを育てていく、というわけだ。「A I」というと『人



から仕事を奪う』とか『人類滅亡につながるんじゃないか』とか、少し怖いもののように言われたりしますが、この体験を通じて、実は人間にとってフレンドリーなものだということを感じてもらいたいと思っています。県内にはコンピュータ理工学で有名な会津大学を中心に情報産業が盛り上がってきていますが、現在は圧倒的に人材が不足しています。今日参加してくれた子どもたちにはぜひITに興味を持ってもらい、将来の日本を支えてほしいと思います」。



当日は最高気温36℃ともいわれる暑い日だったが、屋外のブースでは、汗をかきながら元気に「石割り」(福島県石材業技能士会)にチャレンジする参加者の姿が見られた。石に刺された「セリ矢」という工具をハンマーで叩くと、大きな石材が見事に割れていき、子どもたちは満足そうな笑顔を浮かべる。

「削岩機で石に穴を開けておき、それをセリ矢で広げるわけですが、意外と力は要らないので子どもた

ちの力でもちゃんと割れるんですよ。私たちの若い頃はこうして手作業で石を加工していましたが、現在の現場では機械で行なっています。もちろん、道具や仕事の仕方が変わっても、いいものを作ってお客さんに喜んでもらうという本質は変わりません。今日みたいな体験は日頃はなかなかできないでしょうから、もし『面白いな!』と思ってくれる子がいたら、ぜひものづくりの道に進んでもらいたいですね」(福島県名工会 菊地芳夫会長)。



伝統的な職人の仕事から、最新のIT技術まで、様々な仕事との出会いを提供した「ものづくりふれあいフェア2018」。ものづくりの楽しさに触れた子どもたちの中から、将来の名工や優れた技能者・技術者が誕生することを期待したい。